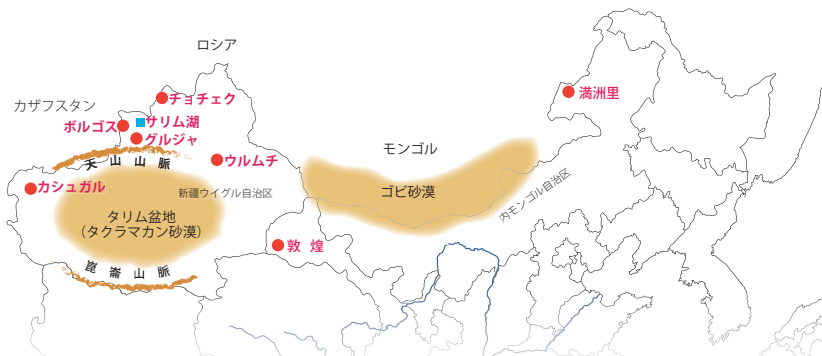




■ フォトエッセイ ■

中国の辺境を歩く

写真・文
森 永 正 裕



ウルムチからグルジャへ向かうプロペラ機

●新疆ウイグル自治区～ウルムチからホル
ゴス、チョチェク、カシュガルへ

筆者が駐在していた上海から新疆ウイグル自治区の区都ウルムチまで飛行機でおよそ四・五時間、東京までの約二倍の距離がある。航路のウルムチ寄り半分は一面の褐色世界。甘粛省と内モンゴル自治区の境目を飛ぶので、眼下に見えるのはゴビ砂漠ということになる。

上空一万メートルから見下ろすと、人類の生活の営みはおろか、緑色も、水も、生命の痕跡すら視界に入っていない。「ここに一人で降りたら生きてゆけないな」と思って眺めていると、時おり「筋」が見える。道路だ。古のシルクロードの真上を飛んでいることに気付く。古代でさえ、この土地を人類は往来していたのである。人類のちっぽけさと偉大さを併せて感じ得るフライトだ。

〈ウルムチ〉

ウルムチ空港へ降り立つ。同行するウイグル初体験の中国人は、あたかも異国へ舞い降りた心持ちでウイグルの玄関口に降り立つが、市内へ繰り出す彼らから異口同音に発せられるのは、「やっぱりこれも中国か」という、やや失望を含んだ台詞である。人口構成を見ると自治区全体ではウイグル族が約四五％、漢族が約四一％（二〇〇〇年人口調査。だが、ウルムチ市では七割以上が漢族。人口約二五〇万人区都として、中央アジアとの貿易拠点として近代都市化したウルムチを訪れる中国人は、異国情緒への期待を裏切られることとなる。

市中心部のバザールの中央に塔が立つて



イスラム寺院を見下ろす。
礼拝するイスラム教徒と瓦礫の散らかる屋根上に複雑な感慨

〈サリム湖・ホルゴス〉

ウルムチでプロペラ機に乗り換えて西へ一時間、イリ・カザフ自治州の州都グルジャ（伊寧）からさらにバスで三時間、カザフスタン国境の街ホルゴスへ向かう。途中やや北に道を逸れ、天山山脈の山道を登ること一時間、標高二〇〇〇メートルの山あいには雄大に広がるサリム湖に立ち寄る。湖畔の草原は、現在もカザ

いる。塔の天辺から隣接するイスラム寺院を見下ろすと、数百人はいようか、正面入口前の歩道に座り込む人の群れ。平日昼間にもかかわらず多くのイスラム教徒が礼拝している。「仕事はどうした？」という疑問と同時に、宗教や信仰というものと生活との密着度を肌で感じる。それより、下から見上げると荘厳なイスラム寺院も、上から見下ろすと屋根上に散乱する瓦礫の山。仰々しい金色の玉葱とのアンバランスに少し興醒めする。



サリム湖へ向かう山道で羊飼いに遭遇。バスはしばらく立ち往生



標高2000mに位置するサリム湖。湖畔は現在もカザフ族の遊牧地となる

フ族の夏の遊牧地として羊やラクダを育てている。カザフの語源は「放浪人・自由人」という意味だそう。サリム湖へ向かう山道では羊飼いの一群に出くわし、バスが一五分間ほど立ち往生した。大自然のなかで自由に放浪しながら暮らす遊牧民の空気に触れた寄り道であった。

ホルゴスは隋唐代よりシルクロード天山北路の要衝として栄えた歴史ある街だ。現在でも陸路貿易では自治区最大の通関量を誇る。ホルゴスからカザフスタンに抜ける貨物の多くは、遠くヨーロッパまで運ばれる。シルクロードの要衝は今もその役割を果たしている。

国境付近に巨大なデパート風の建物。中国初の自由貿易区に設けられた貿易センターだ。筆者が訪れたのは完成後間もない頃。建物のなかには工芸品、伝統衣装、皮革製品などの商店が軒を連ねるが、客の姿はほとんどない。上海協力機構のプロジェクトとして鳴り物入りで開発された自由貿易区だが、巨大デパートの閑古鳥ぶりをみると、他人事ながら心配になる。

〈チョチェク（塔城）〉

ホルゴスから北東へ直線距離で約三五〇キロメートル、山脈を二つ越えると同じくカザフスタン国境の街チョチェク市だ。自動車で山を越えて向かうと数日を要するため、実際はウルムチ経由で飛行機を乗り継ぐ。新疆ウイグル自治区北部は、砂漠が広がる南部と異なり、気候は比較的湿潤で森林地帯も多く美しい土地だ。これまでチョチェクを訪れた日本人はどれくらいいるのだろうか。緑豊かな静かな街の国境に立ち、遥かなる中央アジアの大地に向き合う。

街の中心から一五分程で国境に着くが、そこまで舗装されていた道



ホルゴス国境で通関を待つトラックの列。遠方の白い建物はカザフスタン側施設



ホルゴス国境自由貿易区の「立派な」国際貿易センター



塔城市の国境ゲート「巴克図口岸」



塔城市国境ゲートからカザフスタンを望む。カザフスタン側の道は未舗装

路もカザフスタンに入ると未舗装のようだ。たかだか舗装の有無でも国境でそれを目にすると「経済」とか「政策」とか、国と国との差異という大きな話に思いが巡り、その心境がまた我ながら滑稽でもある。

〈カシュガル〉

ウルムチから南西へ飛行機で約二時間、中国最西端の街カシュガルまで足をのばす。タクラマカン砂漠が広がるタリム盆地の西南端に位置し、周囲の山々からもたらされる豊富な水資源に恵まれたこのオアシス都市は、シルクロードの要衝として古くから栄えた。敦煌で「天山南路」と「西域南路」に分かれるシルクロードはカシュガルで再び交わり、南はペシャワール、西はサマルカンドへと通じる。まさに交通の要衝であり、この地には一度ならずトルコ系の王朝が成立した。

ウルムチとはうって変わる異国情緒に、同行した中国人も大喜び。カシュガルは伝統的イスラム教徒のトルコ系ウイグル族が人口の八割を占める。喜ぶ中国人を尻目に、「ここも中国の一部か……」と、その国土の広大さに驚愕する。ウイグルの生活のなかで使われる時間は「北京時間」と「新疆時間」の二通り。時差は二時間。時間の話をすると、「北京時間か？」と確認される。北京時間で言えば日が暮れ、空が暗くなり始めるのは午後一〇時過ぎ。夕食を終え午後九時過ぎにほろ酔い加減で店を



カシュガルの観光名所で土産を売る女性たち

出ても空は真昼の明るさ。不思議な体験である。

●内モンゴル自治区・滿洲里市

北京から更に北へ飛行機で約二時間、内モンゴル自治区の北端に位置するロシア国境の街、滿洲里市に降り立つ。人口約二〇万人、住民の三割はロシア人、残りのほとんどがモンゴル族である。空港から車で草原を抜けて市内に入り、一五分も走ると反対側の草原に抜け出る。とても二〇万人も住んでいるとは思えないこの小さな街は、中国最大の陸路交易都市だ。

市内で最も大きな建物は税関である。中露貿易の実に六割が通過するこの街の税関は、全国四一箇所の第一級税関（税関総署直属）のうち、唯一「県級市」に設置された税関だ。中国からの輸出は衣料品や工業部品、ロシアからの輸入は木材原料が主である。街の南東側には市街区とほぼ同面積の木材加工地区があり、輸入原木はここで材木に加工され中国全土に送られる。広大な自動車修理地区には、ロシアナンバーの自家用車が並ぶ。部品調達が難しいロシアから国境を越えて修理に来るのだそう。

街の北西の外れにロシアとの国境ゲートがある。ゲートは鉄道と道路の二箇所。鉄道ゲートは観光地化してお

り、料金を払ってゲート付近まで入場すると石標の置かれた緩衝地帯まで踏み込める。前方には銃を持ったロシア兵の立つ監視塔が間近に見える。「この鎖を飛び越えると撃たれるのか？」と、あらぬ興味も湧き出てくる。要注意だ。

「今自分が立っているのは、あの中国とロシアの境目だ」と思うとむやみに緊張してくる。遙か向こう側に、そして遙かこちら側に、日本とは比較にならない広大な中国とロシアという国土が広がっているのだ。

「国境」「民族」、いずれも世界では当たり前の現実であるが、多くの日本人にとってはなじみの薄いものだ。筆者として三〇歳代半ばにして初めて国境線に立った。

振り返って今の日本。海の国境が騒がしく隣国の軍事的脅威が指摘され、そして政府の外交戦略には国民から疑問と不安の声が叫ばれる。日本人の国際感覚が世界の「当たり前」と掛け離れている事実は、多民族が混在する街や、国と国の境目に立てば容易に肌で感じ取れる。中国は有史以来、広大な国土、長大な国境線と多くの隣接国を有し、内にも外にも多数の民族が入り乱れてここまで来た。日本より外交が一枚も二枚も上手であつても不思議はない。



自動車修理工場にはロシアナンバーの車が並ぶ



街外れの丘から滿洲里を望む。街の向こうはロシア



滿洲里の鉄道国境ゲート。奥がロシア側のゲート

国境の石標。奥の監視塔はロシア側のもの



国境ゲート上よりロシア側を望む。下は石標の置かれた緩衝地帯内の撮影スポット



もりなが まさひろ／アジア経済研究所 研究企画課
2006年8月～2010年10月 ジェトロ上海センター勤務